

作業療法士と介護職との排泄関連動作の着眼点の相違について

作業療法士学科夜間部

【背景】

現在、日本は諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行しており、団塊の世代（約 800 万人）が 75 歳以上となる 2025 年問題が存在している。

これから増加が見込まれる高齢者の身体機能の維持・向上・介護予防のために他職種協働・チームアプローチは欠かせないものである。

また、入院患者が在宅復帰するための条件として、排泄関連動作の自立が大きく取り上げられている。私達は、対象者の自立に向けた機能回復の援助を行う作業療法士(以下、OT)と、対象者の日常生活に関わる介護職(以下、CW)とで、排泄関連動作に関する着眼点の相違について研究することにした。これらを明らかにする事で、相互理解が深まり、対象者の援助・目標への共有に役立つのではないかと考える。

【方法】

本研究の調査は、近畿圏内の医療機関及び福祉事業所に所属する OT73 名と CW85 名を対象に行った。データの収集方法は、臨床現場での作業療法士と介護職との排泄関連動作の着眼点の相違について、アンケート内容の説明・同意を得た上で、量的調査を行った。倫理面への配慮として、大阪医療福祉専門学校卒業研究倫理審査委員会(大医福第 17-教-15 号)において承認を得て実施した。

【結果】

1. 質問項目「どの ADL が自立できていれば在宅復帰できると思うか」に対して、OT では、「起居(58%)」が最も多く、二番目に「排泄(27%)」であった。CW では、「移動(35%)」と「排泄(34%)」がほぼ同数であった。

2. 質問項目「排泄関連動作において注意する点はその部分か」に対して、OT、CW とともに、「身体機能(OT33%)(CW55%)」が、最も多かった。

3. 質問項目「対象者に対して他職種との連携は問題なく行えているか」に対して、OT では 73%、CW では 74% が「はい」と回答した。「いいえ」の理由には、「情報共有が不十分」「それぞれの職種の思い違い、話し合いや歩み寄りが大切」など、コミュニケーションに関する回答が見られた。

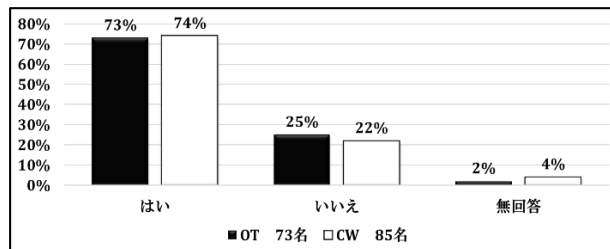


図 1 対象者に対して他職種との連携は問題なく行えているか

【考察】

OT、CW とともに移動の初期動作となる起居や移動そのもの、排泄、身体機能など重要視する点に大きな相違は見られなかった。しかし、選択理由に注目すると、OT では、対象者の自立と介護負担軽減の視点からの思考傾向があり、CW では、対象者を介助する視点からの思考傾向があった。

また、他職種連携に関しては、OT、CW とともに概ね問題はないとの回答がほとんどだったが、問題があると回答した理由には、コミュニケーション不足、情報共有不足、時間調整不足などが多かった。

これらを改善し連携の向上を目指すには、各病院・施設で話し合いの場を設け、双方向のコミュニケーションを深めることが重要だと考える¹⁾。その結果、他職種間の連携が向上することで、対象者に対するより良い援助が可能になるのではないかと私たちは考える。

【まとめ】

排泄関連動作について OT と CW の相違が明らかになった。また、より良いコミュニケーションを図り、他職種連携を深めることで、患者様にとってより良いアプローチを行うことができると考える。今後の課題については、対象者を CW だけでなく PT や Ns など領域の幅を広げ、選択肢の幅を狭くし、疾患を絞る、対象者の分野・領域を限定する等の点を改善して研究することが必要である。

【文献】

- 1) 荒木登茂子, 大倉朱美子: 医療現場におけるチーム医療. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌. 2(1), 2012, 38-43.